

## 令和5年度 研究概要

<p>所属名</p> <p>特別支援教育センター</p>	<p>研究会議名</p> <p>支援教育研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p style="text-align: center;"><b>対話による支援方法の振り返りが生む校内支援の好循環</b> — 詳細な観察と、明確な評価による見直しを手立てとして —</p>
<p>資質・能力 育成を目指す</p>	<p style="text-align: center;">教員の子どもの観察する力を高め、振り返りを通して経験を知識化する</p>
<p>研究内容</p>	<p>12年ぶりに生徒指導提要が改訂され、社会の急激な変化とともに、児童生徒の発達上の多様性や家庭環境の複雑性も増していることが明記された。「かわさき教育プラン」にも、「子どもたちを取り巻く環境の変化に伴い、課題が多様化・複雑化する中で、学校では、子どもが抱える課題に対して、組織的な支援を進められるよう校内支援体制の構築を図る」ことが示されている。文部科学省が明示している特別支援教育コーディネーターについて、本市では、令和4年度より全校種で「支援教育コーディネーター」という名称に統一し、全ての川崎市立学校に配置した。</p> <p>本研究会議では、支援教育コーディネーターにアンケートを実施した。その結果から校内支援体制、つまり「学校がチームで支援する仕組み」は整ってきていると考えられる。一方で、「今、対応に苦慮していること」として得られた自由記述を分析すると、個別の指導計画やケース会議が子どもたちへの支援につながっていないこと、個別の指導計画とケース会議が繋がっていないことが分かった。個別の指導計画を支援に活用することや、効果的なケース会議を行い支援の方向性を見出すことが、校内支援の好循環を生み出すと考えた。</p> <p>個別の指導計画の活用や効果的なケース会議に必要なことは知識やスキルであるが、それらを獲得する方法として、「対話による支援方法の振り返り」を提案する。経験したことを言語化することで知識につなげ、詳細な観察に基づき客観的かつ具体的に話すことでスキルアップにつなげることを目指している。本研究における「対話による支援方法の振り返り」とは、各学校において月1回以上の頻度で、支援方法の妥当性を明確な評価により見直していくこととする。振り返る場は既存の会議、日常的な情報交換などの場が考えられる。効果の検証は、対象事例の支援プロセスの分析や支援に関わった教員へのアンケート等で行う。「対話による支援方法の振り返り」によって、支援の継続や支援方法の早期の見直し、支援ネットワークの広がりが期待できる。</p> <p>対象事例の支援プロセスを追っていくことになるが、本研究は事例研究ではなく、事例を通して、校内支援体制や支援の好循環が生まれる要因を探る研究である。</p>